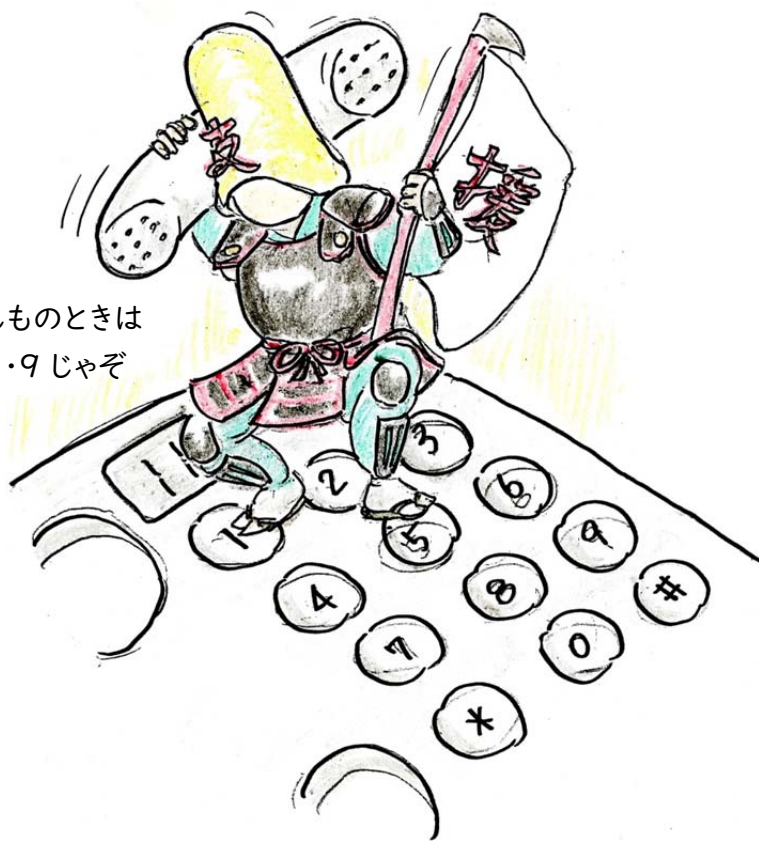


# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.1

も、もしものときは  
11……9じゃぞ



## キャラクター紹介



しえん  
支援くん

代々市民家につかえる火災予防の精。45歳。  
中間のご助と共に、市民扶(たすく)・助(たすく)・守(まもる)の3代に仕え、数々の武功を挙げている。好物は大正海老と長生殿。乗馬が得意。最近のご助の素行に苦勞が絶えない。



えんひめ  
援姫

市民家の姫様。6歳。  
2歳の時に支援たちに出会う。ご助がお気に入りだが、一番好きなのは支援で、支援が困ることをするのが好き。コンペイ糖が好き。点徳幼稚園では、お遊戯が一番上手。



すけ  
ご助

支援の中間<sup>ちゅうげん</sup>。60歳。  
頑固で横着者だが、支援と仕事をするのが好き。姫が呼ぶ「ぼすけ」がお気に入り。甘酒に目がなく、煙草を愛する。

拙者（意：私）は「援姫様」に、お仕えして5年になりますが、最近は姫様の悪戯に少々手を焼いておりもうす。

先日も仏壇でなむなむ・・・と、奥方様の真似をして、何やら称えておいでで、やれ、殊勝なことよ、と感心しておりましたが、四半刻（意：30分）もせぬうちに声がせぬ。やれやれ、まだ幼いのおと仏間を覗いてみれば、蠟燭の炎が煌々と、さらには開け放した襖戸から吹き込む風で炎がゆらゆらと・・・火事になったら大変と、拙者が消したのでござるよ。



付けっ放しは  
危のうござる!!

一事が万事、姫様のお相手は大変でござるが、よろしければ拙者、「支援くん」と姫のお相手をいたしながら、防火の勉強でもいたしませんかの。

わたくしが出仕（意：仕える）する市民家は、かの賤ヶ岳の七本槍、利家さまに付き従い武功をあげた家柄で、金沢城下に二階建て 35 坪の屋敷を賜っておりもうす。契約電流は 30 アンペアと、まずまずの家格を拝領し、ご主人に奥方様、援姫様のご家族と、お助けするわたくし「支援」と中間の「ご助」の 5 人（※）が暮らしております。30 アンペアと大きな電流を拝領しておりますが、目に見えぬものを信用出来ないのが世の習いともうしましてな、拙者も、あのビリビリが大の苦手。おまけに細目に掃除してやらないとトラッキングという痲癢までおこします。



あっ、忘れておりもうしたが、拙者支援と中間のご助の姿は普通の方には見えませぬ。実を申しますと、拙者達がこの市民家に参りましたのは、昭和30年4月28日のこと、先々代のご当主、市民扶<sup>たすく</sup>様が火災共済を契約されましてな、その機会に、ご助ともども市民家に仕えることとなりもうしたのでござる。

それから今日まで、三代にわたり市民家の皆様と平穩に暮らしておりもうしたが、5年前の桃の節句あたりでござろうか、援姫様の<sup>ふしど</sup>臥所（意：寢床）の傍らでご助と日課の<sup>としゅくみうち</sup>徒手組打（意：素手で戦う）の<sup>けいこ</sup>稽古をしていたところ、<sup>せんこく</sup>先刻（意：さきほど）まで昼寝をしておいで<sup>の</sup>の姫様が、拙者達の組打ちを<sup>ご</sup>覧になりながら笑うておるではありませんか。

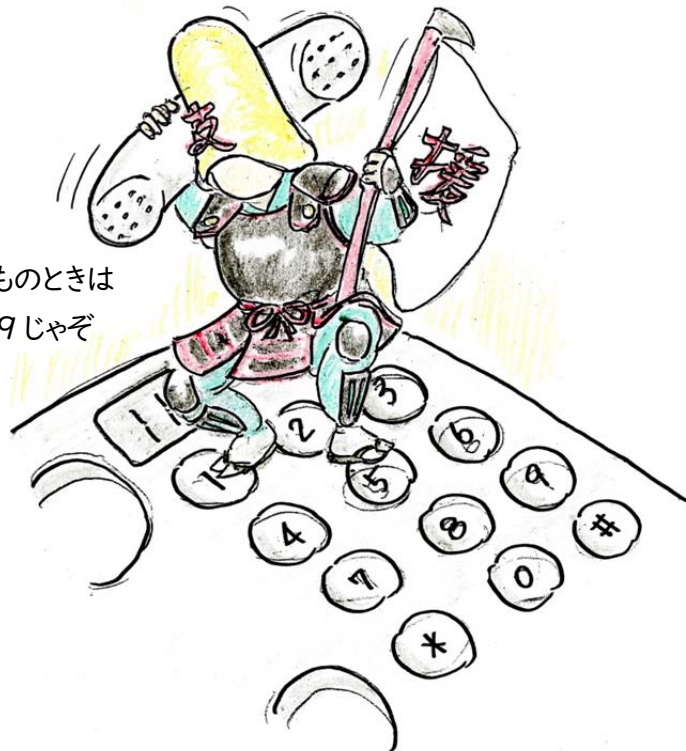
見えぬはずじゃがと、一旦は場所を変え、再びの組打稽古をしておると、姫様が覗き込むようにして、「にゃにしてるの？」とのたまわ（意：話さ）れて、これはもう見えておいでじゃと確信し、「姫様にはわれらが姿お見えでござるか？」とお尋ねしもうした次第。



まった、待った、ご助！  
儂は主人じゃぞ!!  
本気を出すな!!

それに援姫さまがお答えは、「にゃにしてるの？えんも遊ぶ。」とのたまわれ  
ば、主家の姫様のおんお言葉でもあり、無下（意：冷たくあしらう）にもでき  
ず、「にゃにしてお遊びいたしまするか？」といられ（意：答える）ば、「に  
ゃんでも」とおこたえなされますのを「拙者達は火災共済をお教えすることし  
か出来もうさぬ不調法者（意：行き届かないもの）にござれば、姫様のお気に  
召すお遊びは、聊か（意：少しも）も思い浮かび申さず、お許し願います。」  
と許しを乞うたのでござる。が、姫様は何が気に入ったのか、「キョーサイ、キ  
ョーサイ」と繰り返すばかり。仕方なく防火マニュアルの①「火災の時は11  
9番」をご覧にいれましたところ、「きゃさいのときは、いち、いち、きゅう」  
と、おんお枕を抱えて同じように踊りまいらせて流石に市民家の姫様よと得心  
（意：理解・納得）した次第でござる。

も、もしものときは  
11……9じゃぞ



と、まあ、姫様との出会いはこのようにして始まり、それから三日にあげず

(意：ひんぱんに)

「ちえん（支援）、ぼすけ（ご助）はどこじゃ」とお召し（意：呼ばれる）になるようになりましてな、肝心の家の守りがおろそかになりはしないかと心配しておりもうしましたが、3年前に姫が幼稚園にお通いになられるようになってからは、<sup>ようや</sup>漸く組打の稽古もできるようになりもうした。

されば、姫様がお戻りなられる前に、ザザッと市民家の防火マニュアルに目を通して下され。

ところで<sup>きてん</sup>貴殿（意：あなた）は火災の原因を幾つ知っておりもうすかな？付け火（放火）にガスコンロ、たばこや電気ストーブ、落雷や先刻お話ししたトラッキング、LED点灯管や少なくなりもうしたがガス漏れなどがござる。

まずは付け火（放火）対策からじゃな、この付け火というのは、拙者らが知っておる夜討ちとは異なり、単に他家の御門やお屋敷に火を付け、楽しむという理解に苦しむ輩が多くなっておるのじゃと、隠居された長谷川さまのところに平蔵殿も嘆いておいでじゃ。付け火からお屋敷をお守りするには、まず燃えるものを外に置かない！整理、整頓が肝心じゃよ。



外に出しっ放しはだめよ。  
よ、夜討ちされたら大変だよ！

先日、拙者も奥方様が外に出しっぱなしにしておかれた新聞紙の束を厩<sup>うまや</sup>（意：馬小屋・現在の車庫か？）まで片しておいたのじゃが。しっかり者よとの評判の奥方様が朝っぱらから沢山の新聞の束を出されて、何と非常識なと憤慨しておったのでござるよ。

いっとき一刻（意：2時間）掛かってきれいに片づけた所へ、他家の郎党共<sup>ろうとうども</sup>（意：家来達）が大勢で討ち入って参り案の定新聞の束を探し回っておったわ。

ロ々に「廃品回収」とか訳の分からん言葉を口にしておったが、拙者が機転と行動がもう少し遅ければ大変なことに成っておったと、今、思い出しても背筋が寒うなりもうすよ。

続いては賄<sup>まかな</sup>いどころ（台所）に参ろうか。

最近はオール電化とか言って西洋かぶれのお屋敷が増えてまいったが、主家は伝統的なLPGじゃ。戦<sup>いくさ</sup>支度<sup>じたく</sup>など時間がないときは火力が強く、安価<sup>あんか</sup>なLPGが一番じゃと拙者は思っておるが、やはり裸火を使うから油断は禁物じゃ。

炊事当番じゃった先月、拙者はご助の分も一緒にガス海老の天ぷらを揚げておった。翌日、姫様がサイクリングに持参する海老天もな。姫様のは大正海老じゃぞ大正海老。その時姫様から電話が掛かって来ての、拙者は大正海老の揚げ具合など、つい長電話をいたしてな。気が付いたら天ぷら鍋に火が入り、大切な旗印<sup>はたじるし</sup>（意：家紋等が入ったものが多い）を焼き尽くし、もう少して市民家から火災を出すところでござったよ。

姫様  
明日のサイクリングで  
ござるが……

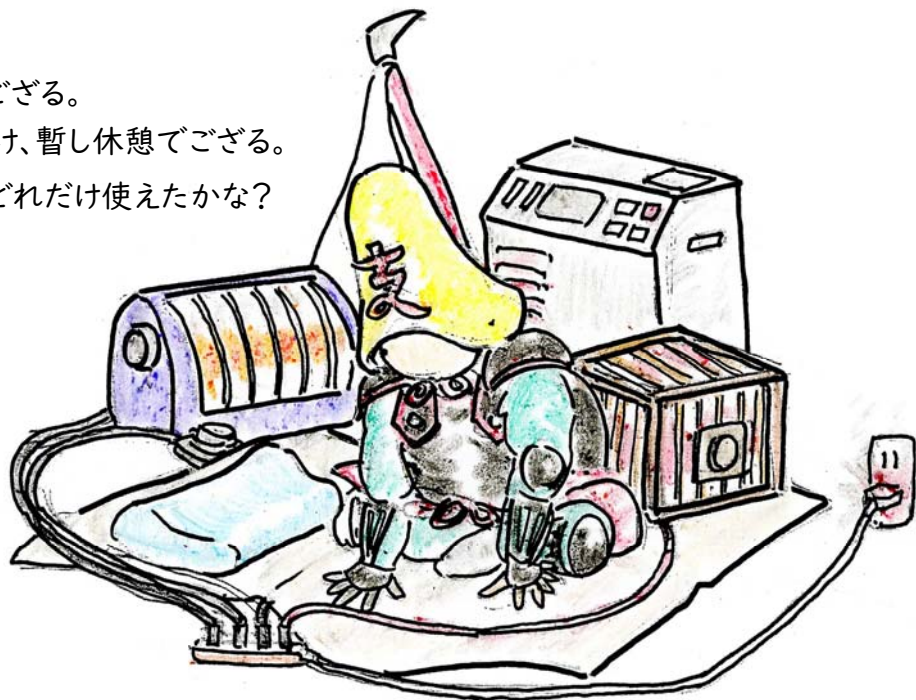


拙者が逃げ帰った、いや、移動した後の賄いどころの惨状を目にした主<sup>あるじさま</sup>様は、翌日には安全機能付のガスコンロに取り替えられたんじゃ。災い転じて福となる良い話じゃろ？拙者も旗印を防災製品に替えたし、コンロを使用しているときはその場を離れたり、長電話はせんようにしたりしておるぞ。

次は居間、居間は今様<sup>いまよう</sup>（ダジャレか？）に言えばリビングじゃな。最近の家は断熱が進んで、冬でもエアコンやファンヒーターなどを使い、炬燵<sup>こたつ</sup>を使わない風潮だとか。でも拙者は外から帰って直ぐは、やはり電気ストーブじゃな。

見ろ、このブウウンという、如何にも働いておるぞと訴えるような小気味の悪い音を。やはり寒い冬はこれに限るが、まだまだ暖を取るアイテムは沢山あるぞ。ほれ、これだけ使っても十分なアンペアを主様は賜っておいでじゃ。なんと剛毅<sup>ごうき</sup>（意：つよい）なお方よと、やはり先年<sup>せんねん</sup>（意：以前）の冬の夜長に暖を取り楽しんでおったら、根元のコンセントから煙が出て部屋中が煙だらけになっただな。

朝晩は冷えるでござる。  
明日の支援に向け、暫し休憩でござる。  
さて、アンペアはどれだけ使えたかな？

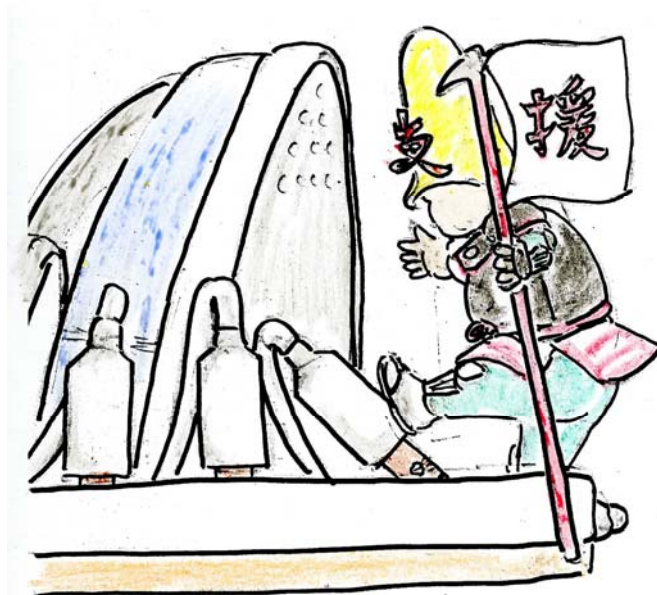


すわ！（意おどろきや気づきの掛け声）曲者参上か？と拙者が叫ぶ前に主様が「臭物（主様の言葉で意味不明。ダジャレか？）」と叫ばれ、コンセントを引っっこ抜いたのでござる。それから数刻、主様と奥方様が「蛸足はするな。」「私じゃない。」と言い争っておったが、拙者には関係のないこととござる。ただ、蛸足はダメという大きな教訓を得て候（そうろう）よ。

ついでに蛸足はダメの教訓をいま一つ。

主様と奥方様の諍い（いさかい）が収まって、また、仲睦まじいお姿に戻られ、拙者達も胸を撫でおろしたところへ、中間のご助が注進（意：目上の人への報告）に参りましてな、またぞろ（意：また）蛸足の現場に出くわしたのこと。ご助の案内（意：案内）で拙者が馳せ参じると果せるかな（意：案の定、予想どおり）一本の延長コードに何本ものコンセントが。

「ええい懲りないお方じゃ。」拙者は怒りに任せ、手前のコンセントを蹴り上げ、抜き去ると意気揚々、凱旋の途につきましてござる。

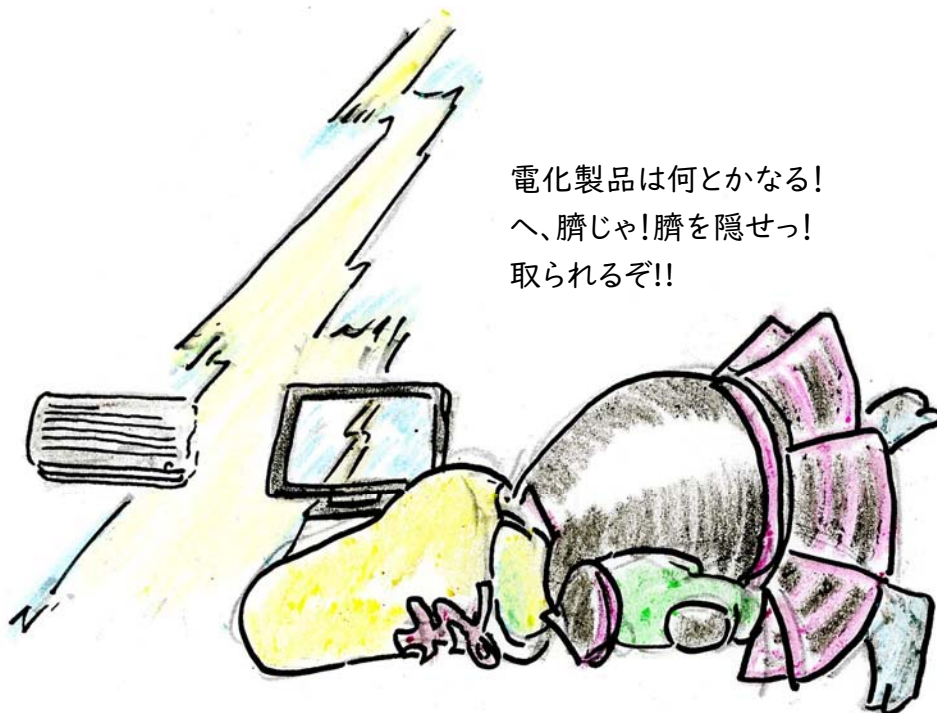


蛸足は止めてよね!!

翌、早朝。

「何でご飯が炊けてないんだ。」との主様の怒声に「知らないわよ。コンセント抜いたの貴方でしょ。」の奥方様の金切り声で目を覚ましたのでござる。何でもかんでも蛸足はダメという訳ではないことと、仲睦まじいご夫妻の中が意外にも脆い<sup>もろ</sup>ということを知った朝でござった。

電気と言えば、知っておったか？雷も電気だそう。ピカッと光ってゴロゴロと。拙者はもう長いことこの屋敷で雷をやり過ごしておるから慣れておるが、貴殿はどうだ？怖くないかい？怖い？ハハハッ、腰抜けめ、雷なんぞ、音はすれども姿はみえずホンに貴方は屁のような歌の文句のとおり全く心配には及ば・・「ドドーンッ ピッカッ」 おっ音じゃ、音が先じゃ、近いぞ。電化製品は補償で直せる！ 臍、臍を取られるぞ。雷様あ、ご勘弁を。



臍は・・・無事か。エ、エッヘンツ。今日の雷は、いや、雷様は機嫌が悪かったようじゃな。

つ、次は、なんだ、次も電気、LED点灯管の話か。LEDは消費電力が少なく長寿命なことから、巷（ちまた）で多く使われるようになっておるがな、LED点灯管を取り付けるには専用の器具に取り換えないと、点灯時に過剰な電流が流れることで火災が発生するんじゃ。

なすび型でソケット方式の白熱電球は専用器具に取り換えなくても大丈夫じゃ。分かっておるか？



LED点灯管でいいか  
確かめてね!

次はガスか。ガス、ふふふっ。実はガスには面白い思い出がござってな。中間のご助は知っておろう？あ奴は中間としては中の中、いや、中の下位の働きしか期待できんでの。拙者が目を離すと直ぐに持ち場を離れたり、居眠りしてしまふんじゃが、何故か姫様のお気に入りでの。

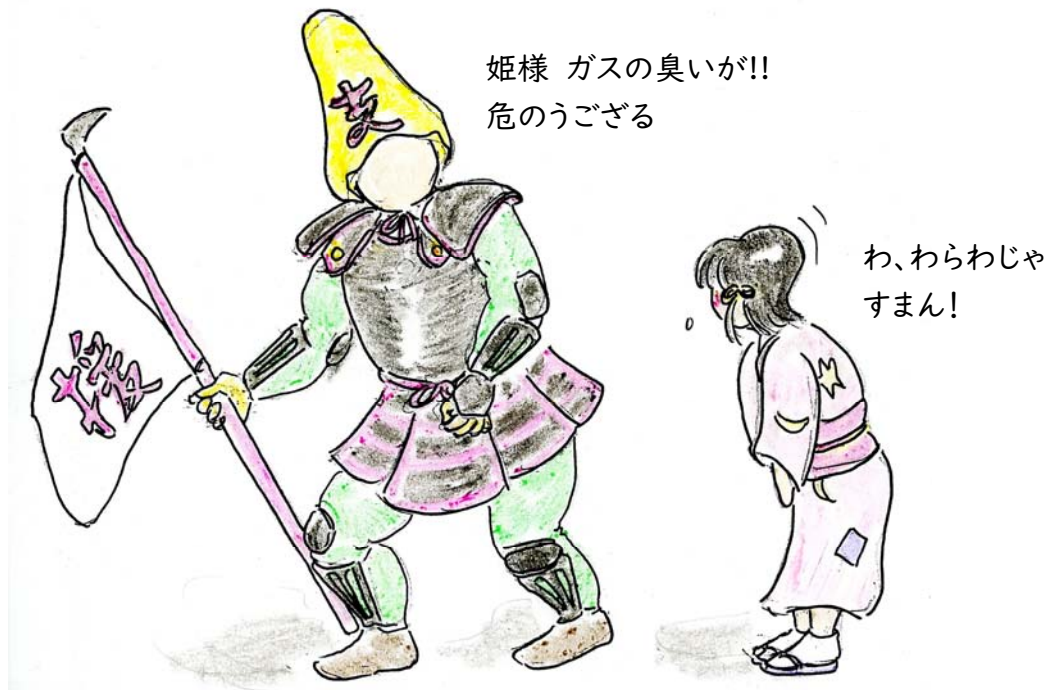
2, 3日も姿を見ないと「ぼすけ（ご助）は？のう、ぼすけをこれへ。」と拙者にせがんで来るので困り果てておる。ご助のほうも姫様の覚えの良いことを笠に着て横着（意：怠ける）になり、大事なお役目にも差しさわりが出た頃がござった。あれはもう半月も前のこととござろうか。ガスコンロは安全機能付きに買い替えたのでござるが、ゴム管は元のまま。30年は過ぎているであろうゴム管は亀裂が出来やすく、市民家を守るうえでも重要な防備の一つとござった。

拙者はこのゴム管の点検をご助に任せておったのじゃが、ご助は拙者の目の届きにくいことを良いことに杜撰（意：いいかげん）な点検を繰り返しておったのじゃ。

その日もご助はゴム管の点検に出向いたまま一向（意：全く）に帰って来ませなんだ。姫にせがまれてご助を探しに賄いどころへ向かった拙者は部屋中に漂う玉葱臭（LPGには玉葱に似た臭いが付けられている。）にガス漏れを確信したのでござる。

「姫様、ガスの臭いが、危のうござる。」と、一度の契約に5回まで許されている等身の術を用いて四尺（約120cm）の大男となり姫の盾となって避難を促

したのござる。なのに、姫様が次のお言葉は「許せ。わらわじゃ・・すまん。  
屁じゃ。」と仰せられたのでござる。



支援、一生の不覚。大事な主家の姫様に恥をかかせまいらせ候。

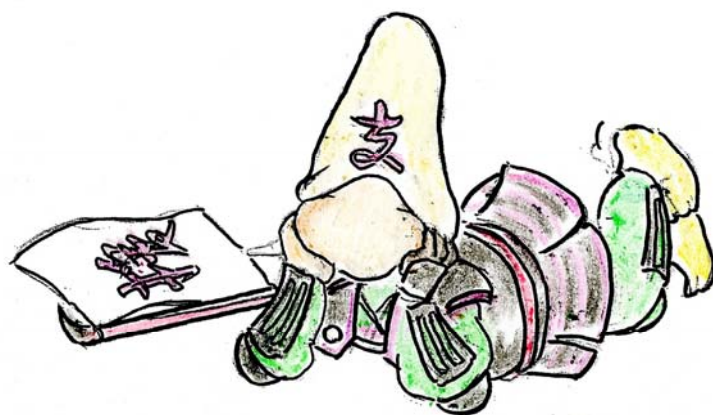
この上は、主従ともども、主様が前でお叱りを受けねばと、ご助の奴をば探しますれば、亀裂の入ったガスパンの傍らで横になったご助めを見つけたのでござる。



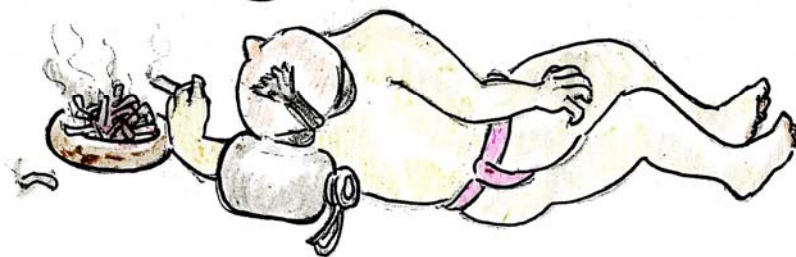
幸い、ゴム管の亀裂は浅く、姫様から話を聞かれた主様が夕方には新品のゴム管に交換し、事なきを得ましてな、姫様がおかきになった恥もガスや屁と同じく雲散霧消いたしまして候。

しかし、全てが順風満帆という訳では御座らん。

ガス漏れを未然に防いだ油断からであろうか、その晩、番小屋でご助と祝杯を挙げたんじゃが、ご助めがまた拙者の忠告を無視しおって、姫様から頂いた甘酒を飲み干し、<sup>あまつさ</sup> 剩え（意：加えて、それ以上に）寝たばこをする始末。



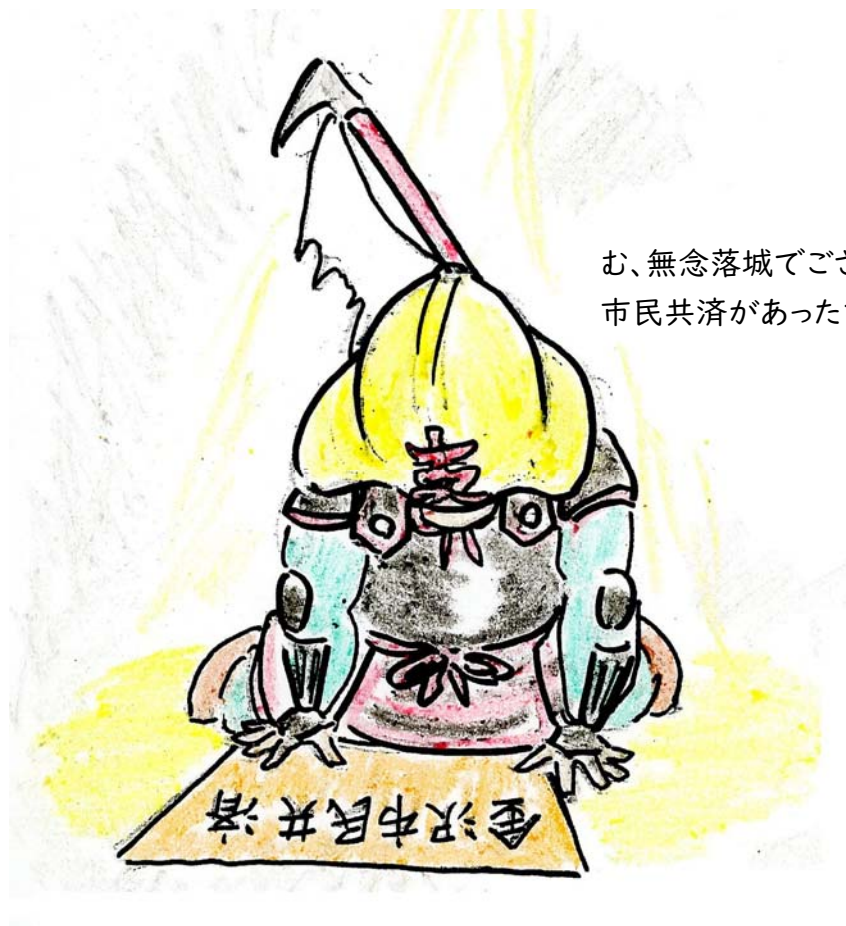
ご助、明日のサイクリングの装束じゃが…  
…ご助!ご助!寝たのか?  
また寝たばこしおって!!



そして夜半<sup>やはん</sup>（意：夜中）、拙者が<sup>かわや</sup> 厠（意：トイレ）で用をたしていると番小屋から火の手が上がったのじゃ。姫様のお住いの母屋に隣接した番小屋からの火はどんどん大きくなる一方。

薄れゆく意識の中で、消防車が近づくサイレンの音を聞いたように覚えておりもうす。

そして翌朝、火災は番小屋を焼いて消し止められており申した。主家の危機を防げなんだ拙者は悲嘆にくれ申した。そのとき、拙者の肩越しに姫様が橙色のチラシをもって参り「ちえん（支援）、キョーサイじゃ、いち、いち、きゅうじゃ。」と仰せられたのじゃ。



「そうじゃ。共済があったではないか。姫様の通報で被害は番小屋だけで済んだ。これぞ天慶<sup>てんぎょう</sup>（意：奇跡）共済の力よ。」と気が付けばご助と二人、うれし涙にくれておったわ。

さて、これで、本日の拙者の教訓と説明は、ほぼほぼしまいでござる。貴殿さえよければ明日は姫とのエピソードや付帯保険について説明して進ぜようほどこに。

それから、これから貴殿も他家に赴き、支援として活躍せねばならぬ身ゆえ忠告してさしあげるが、中間は・・・ご助がよろしいかと存ずる。 （つづく）